

⑨
B

二〇二五年度

国

語

問題冊子（二～八ページ）

注 意 事 項

- (一) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- (二) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。
- (三) 解答は別に配付する解答用紙の該当欄に正しく記入すること。ただし、解答に関係のない語句・記号・落書き等は解答用紙に書かないこと。
- (四) 解答用紙左下に印刷してある受験学部・学科コード、受験番号、氏名(カタカナ)を確認し、氏名欄に氏名(漢字)を記入すること。もし、印刷に間違いがあった場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。

〔解答用紙記入例（選択式の場合）〕

例一．〔語群〕が二桁で	11 大阪
13 長崎	12 佐賀
14 東京	とある場合

例二．〔語群〕が一桁で	1 大学
3 高校	2 中学校
4 小学校	とある場合

問 X		
16	17	A
/	2	
18	19	B
/	4	
20	21	C
/	/	

問 X		
51		a
/		
52		b
4		
53		c
2		

〔一〕

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

近代の日本人は、明治以来終戦まで、ある規範の仮名遣かなづかいを学校で教えられた。その規範仮名遣を、こんにちでは「歴史的仮名遣」（俗に「旧仮名遣」と呼ぶ。戦後の昭和二十一年一月、その仮名遣にかわって、新しい規範の仮名遣が内閣からコクジ1された。それを「現代仮名遣」（俗に「新仮名遣」という。戦後はこの現代仮名遣が学校で子供たちに教えられた。国や役所の公用文、新聞・雑誌・書籍などもそれに倣ったので、こんにちの日本社会全般の文字生活に、現代仮名遣は浸透し定着した。もちろん、これに法的拘束力はない。現代の国語を書き表すためのよりどころを示すものであつて、専門分野や個々人の表記にまでこれを強制的に適用しようとするものではない。

現代仮名遣施行当初、^{*}「広場の孤独」の登場人物のように、旧来aの仮名遣で文章を書くひとは多かつた。戦前に学校教育を受けて古い仮名遣が習慣になつてゐるひとが、新しい規範に戸惑なつたり馴染めなかつたりするのは無理もない。わたしの父など、いつまでも新旧の仮名遣がコンザイ□していた。

歴史的仮名遣を守つたひとたちは、大きく二つのタイプに分けられる。一つは、染み付いてしまつた習慣をいまだら変えられないというひとたちである。だが、かれらは、習慣を変える労力を惜しんでいるか、新しいことに飛び込んでゆく勇氣がないかのどちらかであるから、その精神的心理的障壁さえ取り除かれれば、ためらいなく現代仮名遣のつかい手になる。現代仮名遣は、老人がパソコンやケータイに触れるよりハードルはだんぜん低い。現代仮名遣しか教えられず現代仮名遣が定着した現代では、こういったタイプは早晚、絶滅することになり、事実、すでに絶滅したであらう。

もう一つは、現代仮名遣bよりも歴史的仮名遣のほうが優れていると確信しているひとたち、あるいはなんとなくそう思つてゐるひとたちである。旧仮名遣に憧憬や郷愁をもつグループも、おおくは歴史的仮名遣の優秀性がその動機になつてゐるらしいから、このタイプに入れていい。かれらの確信の最大の根拠は何かといえ、それは学問的合理性である。歴史的仮名遣にはそれがあつたのに、現代語の実態と歴史的仮名遣とを中途半端に妥協させてチャンポンにした現代仮名遣は、学問的見地からおおい

に疑問である、と。言葉にうるさいと自負するひとたち、すなわち一部の国語国文学者や一部の文化人たちが学問を武器に発言するから、あたかも説得力がありそうであり、あたかも権威がありそうにも見える。言葉に自覚的な若者ほど、その権威に調伏されやすいから、実際に運用するかどうかは別にして、歴史的仮名遣信仰者はあとを断たない。

「歴史的仮名遣には学問的合理性があつた」と言うのは、わたしではない。歴史的仮名遣のほうが現代仮名遣よりも優れていると信じるひとたちが、そう言うのである。^dはたして、そうであろうか。歴史的仮名遣が学問の成果に拠つてゐることに關しては、わたしもそれを認めるに 。だが、歴史的仮名遣じたいが学問的・合理的であるかということになると、それはまた別問題であろう。換言すれば、現代仮名遣にも学問的合理性をみとめる余地があるということである。

それに、なにより仮名遣を議論するとき、その優劣の判定に学問的合理性が必要なのか、という疑問さえわたしは持つ。歴史的仮名遣支持者はおそらく、規範であるためには、とくに言語にかかわる規範は学問的に正しくなければならない、と言うであろう。そうでなければ、日本語の将来を過つ、と。(1)、誤解をおそれずにいえば、わたしは、仮名遣にかぎらず、「規範」というものに学問的合理性や正確性はかならずしも必要とは思えない。すくなくとも常識で考えられる「学問」や「合理」や「正確性」は、規範であることの絶対必要条件にはならない。規範や規則は、その時代の都合によつて、あるいはその及ぶ範囲の都合によつて書き換え可能なものである。

ところで、歴史的仮名遣があたかも過去の規範であつたかのように思うひとは、イガイにおおい。現代仮名遣が施行されている現代において、歴史的仮名遣は規範としては死んでも同然で、それでもつて文章を書くのは、ごくごく限られた特別なひとたちが頑固に古い方式をボクシュしてゐるにすぎない、と。歴史的仮名遣の実践者のなかにも、優れた規範の滅ぶのをノスタルジックに惜しむことが歴史的仮名遣使用の動機になっている、そんなひとがいるのではないだろうか。

たしかに日常の文字生活において、歴史的仮名遣の使用者は、今となつてはごく少数である。だが、かれらも歴史的仮名遣をつかつて文章を書くかぎり、その規範は過去の規範ではなく、現代の規範をつかつて書かなければならない。それがどういふことなのかといえ、歴史的仮名遣が学問的根拠をもつためには、その個々のことばの正しかるべき仮名表記は、いま現在も日々

更新されていなければならない、という意味である。

歴史的仮名遣とは、平安時代初中期におこなわれていた仮名表記を規準にした表記法である。つまり、平安時代初中期の日本人ならこう書いたであろうと推定される表記法である。平安時代初中期におこなわれていた仮名表記と簡単にいうが、しかし、そんなことがどうやってわかるのか。それは、江戸時代以来の国語学という学問によって明らかにされている。その明らかにされたものを規範として採用する、これが歴史的仮名遣なのである。歴史的仮名遣には学問的合理性があるといわれるのはそういうことからであり、支持される所以^{ゆえん}もそこにある。

だが、厳密さを期すなら、学問によって明らかにされた、という言い方はすこし不正確である。いまでもフダン^ホに明らかにされつつある、と言いつつ直したほうがいい。(2)、古代の仮名表記の実態の研究はいまも地道におこなわれているからである。きのうまでの学説が否定され変更されるのは、学問の世界では当たり前のことであって、歴史的仮名遣が学問という確かなものに支えられている以上、それは学問の進展にあわせて日々更新されなければならない。つい最近までは「ツクエ(机)」の正しい仮名遣は「つくゑ」であると考えられていたが、「つくゑ」と表記した平安初期の文献が数例発見され、それによって、「机」の正しい歴史的仮名遣は「つくゑ」であると判明した。歴史的仮名遣は、規範として死んだも同然なのではない。いまでも生きて進化しつづけている。過去のものになったから歴史的というのではないのだ。

——白石良夫「かなづかい入門」による——

*「広場の孤独」……堀田善衛の短編小説。昭和二六年発表。

問一 傍線部 a について。次の一文は「広場の孤独」中の旧仮名遣を非難する文章である。() に入る最も適当な言葉を平仮名で記せ。

かいまきを着込んでぐたツとあぐらをかいたような「()」なんか書くんじゃないよ、スマートなハンサムボーイが立っているような「いる」と書いてくれよ。

問二 傍線部bのひとたちはなぜそう思っているのか。現代仮名遣が劣っていると判断される理由を本文中から三十字以内で抜き出し、その始めと終わりの三字を解答欄の形式に合わせて記せ。(句読点を含む)

問三 傍線部cについて、その内容を説明している段落の終わりの五字を抜き出せ。(句読点を含む)

問四 傍線部dについて、なぜ、そのような疑問を持っているのか。最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

1 現代仮名遣は、信仰としてはありがたみが薄いから

2 現代仮名遣にも学問的合理性のある可能性が残るから

3 仮名遣の優劣は、権威あるひとの発言によって変わる可能性があるから

4 現代仮名遣は、社会活動をする上で運用するのに便利に作られたものだから

5 歴史的仮名遣信仰者は、学問的裏付けより滅び行くものへの郷愁を大切にしているから

問五 空白部に入る最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

1 心もとない

2 肩入れしない

3 あげつらわない

4 やぶさかではない

5 こしたことはない

問六 (1) (2)に入る最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号をそれぞれ記せ。

1 だが

2 さらに

3 たとえば

4 あたかも

5 いやはや

6 なぜなら

問七 傍線部 e のように筆者が述べるのはなぜか。最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 学問などは規範の絶対必要条件ではなく、十分条件であるから
- 2 規範というものは、学問的合理性をすでに含んでいるものだから
- 3 その時代や及ぶ範囲のなりゆきによって、規範はかわり得るものだから
- 4 学問的でない規範などは、設定しなくても、常識の範囲で十分事足りるから
- 5 規範の有無と日本語の将来との関係は、常識で考える範疇はんちゆうを超えたものだから

問八 傍線部 f の具体例となる一文を本文中から抜き出し、始めの五字を記せ。(句読点を含む)

問九 次の各項について、本文の内容に合致するものは1を、合致しないものは2を、それぞれ記せ。

- 1 歴史的仮名遣を守ったのは、その優秀性を信じたひとたちばかりであった。
- 2 現代仮名遣は、戦後の学校教育や社会において、国家の強権のもとに実施された。
- 3 歴史的仮名遣の実践者は、過去の規範ではなく、現代のものを使用する必要がある。
- 4 筆者は、二つの仮名遣のうち、現代仮名遣の方が優れているという立場をとっている。
- 5 平安時代初中期に使用されていたと考えられる仮名表記の研究は、現在も続いている。

問十 傍線部イ、ホを漢字に直し、正確に記せ。

〔二〕

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

如月のほどより、よろづみな冬のころつきて、空の色うらかにけしきだちて、四方山を霞こめたるよそほひ、ことにあけぼの曙のけしき、たとふべき物もなくあはれむべし。^aいにしへの人、春は曙といひけんもうべなるかな。日光藪やぶしb分cかねば、数なdらぬ垣根の内も、冬にかはりて輝きいで、草木おひてみな顔色を生じ、花まち顔になごやかなるけはひうれし。日かげもやうやくのどかになりもてゆけば、人のわざもふるとしよりとまあきありて、いそがはしからず。^e日長くして少年のごとく、こころしづかにゆたけし。このころは陽氣ののぼるけにや、わらはべども紙いかのぼり鷲といふものつくり、長き糸つけ風にまかせてはなてば、高くあがり雲の上まではるけくたなびくをたはぶれとすれば、おいみいfはけみ、空をあふぎ見るもをかし。

冬も来ぬれば、今朝よりなるるうづみ火のもと、やうやう立ちはなれがたし、露gと霜とおきかはし、紅葉色こく、木々のこずゑ浅茅が原も、冬がれのけしきとなり、おもがはりするも秋にことなるながめなり。神無月の時雨もすぎて、日あたたかなれば少し春ある心地す。うべこの月を小春とぞいへる。^hされど、一日二の日、やうやく重なれば、風氣いよいよはげしく、木の葉ふりて、山もあらはに見え、残れる松も峰にさびし。ⁱ春夏秋のえんなるけしき、よそほしかりつるありさま、みなこの時にいたりてつきぬれば、ことの外にもかはれる空かなと、目おどろかれぬる。^j

——「楽訓」——

問一 傍線部 a とは誰をさすか。漢字で正しく記せ。

問二 傍線部 b を十字以内で現代語訳せよ。

問三 傍線部 c と同じものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 山籠れる大和しうるはし
- 2 いかでかうおはしましつらむ
- 3 鮎あゆのしが鰭ひれは我にかき向け
- 4 書き置きし文を読み聞かせけれど
- 5 頭の君まめやかにおそしと責め給へば

問四 傍線部 d・f・i の意味として最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|------|---|------|---|-------|---|--------|
| d | 1 | 小さな | 2 | 粗末な | 3 | はかない | 4 | わずかな | 5 | 限りなく多い |
| f | 1 | 岩室 | 2 | 事情 | 3 | 子供 | 4 | 家々 | 5 | 祝言 |
| i | 1 | 優美な | 2 | つながる | 3 | 殺風景な | 4 | ゆかりある | 5 | 変わった |

問五 傍線部 e の解釈として最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 冬から春への移り変わりを人が若返ったようだと見ている
- 2 春の訪れによつて若者たちが外出するようになることをたとえている
- 3 日の光で陽気がよくなり、万物が生育する季節の到来を予想している
- 4 春の日を人間で言えば生命力にあふれた少年時代に似ているとしている
- 5 日差しが少しずつ強くなる様子を感じて少年時代を懐かしむきっかけにしている

問六 傍線部 g とはどのような様子か、その説明として最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 露や霜が雨へと姿を変える様子
- 2 秋から冬へと季節が移った様子
- 3 霜がとけて露へと変わっていく様子
- 4 露と霜を同時に見る事ができる様子
- 5 初冬から一転して春のような陽気になった様子

問七 傍線部 h とは、陰暦の何月をさすか、漢数字で記せ。

問八 傍線部 j の文法的説明として適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 形容詞の已然形＋過去の助動詞の連体形
- 2 動詞の連用形＋受身の助動詞の未然形＋完了の助動詞の終止形
- 3 動詞の未然形＋自発の助動詞の連用形＋完了の助動詞の連体形
- 4 動詞の未然形＋尊敬の助動詞の連用形＋過去の助動詞の終止形
- 5 動詞の連用形＋可能の助動詞の未然形＋過去の助動詞の連体形

問九 本文の内容に合致するものを次の選択肢から二つ選び、その番号を記せ。

- 1 春の景物としてたこあげを面白いとしている。
- 2 初冬から本格的な冬への推移に寂しさを感じている。
- 3 冬から春になり、忙しくなるのも楽しいことだと喜んでいる。
- 4 新春を迎え、暖かくなるのを待ちこがれる気持ちが描かれている。
- 5 冬とは言いながら、今年は春のように暖かいと感想を述べている。
- 6 日本の四季を自然描写を中心に見つめ、故郷に思いをはせている。

⑩

B

二〇二五年度

国

語

問題冊子(二～九ページ)

注意事項

- (一) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- (二) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。
- (三) 解答は別に配付する解答用紙の該当欄に正しく記入すること。ただし、解答に関係のない語句・記号・落書き等は解答用紙に書かないこと。
- (四) 解答用紙左下に印刷してある受験学部・学科コード、受験番号、氏名(カタカナ)を確認し、氏名欄に氏名(漢字)を記入すること。もし、印刷に間違いがあった場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。

〔解答用紙記入例(選択式の場合)〕

- 例一.〔語群〕が二桁で
- | | |
|----|-------|
| 11 | 大阪 |
| 12 | 佐賀 |
| 13 | 長崎 |
| 14 | 東京 |
| | とある場合 |

- 例二.〔語群〕が一桁で
- | | |
|---|-------|
| 1 | 大学 |
| 2 | 中学校 |
| 3 | 高校 |
| 4 | 小学校 |
| | とある場合 |

問 X	
16	17
/	2
18	19
/	4
20	21
/	/
A	B
C	

Aの解答が佐賀の場合
Bの解答が東京の場合
Cの解答が大阪の場合

問 X	
51	a
/	
52	b
4	
53	c
2	

aの解答が大学の場合
bの解答が小学校の場合
cの解答が中学校の場合

〔一〕

次の文章は、武田泰淳と妻・百合子の口述筆記による作品を論じたものである。読んで、後の設問に答えよ。

武田泰淳『目まいのする散歩』（一九七六年）は、「目まいのする散歩」「笑い男の散歩」「貯金のある散歩」「あぶない散歩」「いりみだれた散歩」「鬼姫の散歩」「船の散歩」「安全な散歩？」と題された八つの章によって構成されている。散歩という形式を一つの入り口として、語り手である「私」の身の出来事が綴られていくというのが基本的な構造である。

『目まいのする散歩』は、基本的に「私」という一人称の語り手に焦点を合わせているが、百合子の日記の借用という方法によって、その語りにも揺らぎが見え始める。たとえば「宝石のようなところ」と、彼女は感じた「や」まばたき一つしても惜しい」と、彼女は思った「のように、百合子の日記では「私」という一人称の主語で綴られていた心情が、三人称の「彼女」に書きかえられる形で引き写されている。それによって、一人称の語り、他者の内面を断定的に語る三人称の語り、混ざり合うというキミヨウな文体が出来上がっている。

あるいは、「私」がその場にいなかった場面の出来事が詳細に記されるという視点の複数化や移動が生じることもある。「今日は晴れてはいない。霧がかかっている」と、彼女より二時間ほど早く起きていた彼女の主人は言う」という叙述に見られるような、「私」が自分自身のことをあたかも客体（彼女の主人）であるかのようにまなざす距離のとり方も特徴的である。これらはいずれも、百合子の日記の記述を自身の文章のなかに組み込むことによって生じた語りの変化だといえるだろう。〔1〕

^a こうした文章が生成されていく過程を分節化してみれば、それは単純に泰淳の口述を百合子が筆記するという一方通行の作業として説明できるものではない。まず百合子を書いた日記があり、その内容を泰淳が読み、必要な部分を抜粋しながら読み上げ、泰淳の声で読み上げられた文章を、日記の元々の書き手であった百合子本人が再び筆記するという複雑な作業がここでおこなわれている。このとき言葉は、口述者（泰淳）から筆記者（百合子）へと一方的に受け渡されるものではなく、百合子から泰淳へ、そして再び百合子へと繋がる円環のなかで、両者のあいだを巡るものとしてある。当然、それは泰淳による百合子の書いた言葉の属領化という図式とはその性質を異にしている。書き、読み、読み上げ、再び書くという循環する構造のなかで、百合子

の言葉が泰淳の文体に混交し、一人称の語り手の視点には収斂し得ない他者の存在を内部に含み込んだ文章が生成されるのである。

たしかに、百合子の日記の内容を吟味し、文章を取捨選択し、自身のテキストに取り込んでいるという点では、それは泰淳という書き手によって統制されているようにも思われる。しかし、そうした作業がすべて泰淳自らの自由意志の結果だと言い切ることにはできない。百合子の日記がロシア旅行の曖昧な記憶をホカンする装置になっている以上、泰淳は彼女に「書かせ」つつ「書かされている」のだともいえる。百合子の日記の表現を引用したことで生じる語りの違和や不整合を繕わず、あえてそのままに保持する文体は、語る主体の流動的な意識や視点を強く前景化させている。²

こうした書く行為の特徴を寓意するのが、「私」が高校時代に静岡県田方郡の内海で古い和船を漕いだ経験と、現在の船の旅と結びつけられる場面である。「私」は和船に乗った感覚を回想しながら「浮かんでいる、流されている、漕いでいる、風景が変ってくる、いずれどこかで引き返さねばならない。頼りないような、たのもしいような気分が、自分が何か新しい人間に生れ変わることができる瞬間に立ち会っているようで、かけがえのないスリルを味わう」と述べる。予め定まった目的地を目指すのではない、予測不能な波の流れに身を任せることへの恐れと、それ以上の快さといったものがここからは読み取れる。しかし一方で、このときの「私」は、その船を「たった一人で漕いで行く方が面白い」とも語っており、他者のカンショウを避けようとする意識も垣間見える。

その後、「私」はこの和船を漕いだ思い出深い田方郡の内海に「女房」を連れて行き、今は夫婦揃って観光用のソ連船に揺られて「ここまで運ばれてきた」というカンガイに^二浸る。「私」の船と海にまつわる回想は、高校時代の経験を出発点として、現在のロシア旅行の船上へと繋がっていくのだが、それは「たった一人で」船を漕いでいた「私」が、「女房」という他者とともに一人では辿り着けなかった遠い海へと「運ばれてきた」、その変化の過程を内包する叙述でもある。百合子と自らの言葉が接触する空間を漂うことで、偶発的に言葉が紡ぎ出され、思いもよらぬ文章が生成されていくような、泰淳と百合子の口述筆記の本質を捉えた

A

としてこの叙述を読むこともできるだろう。その意味において、『目まいのする散歩』は、まさに「他者とともに書く」

という書く行為の協働性を実践的に示したテキストなのである。 3

加えて指摘しておきたいのは、「私」が（他者とともに書く）という方法を経由することで、書く行為に対する自己批判的なまなざしを自らの内部に折り返しているという点である。「船の散歩」の末尾では、日本陸軍二等兵として日中戦争に加わった当時、「兵隊だった私」が書いた記録が引用されている。進軍の様子やそこで見た風景を一人称で語るこの記録を、語りの現在の「私」は「自分一人で詩的になっていくつもり、傍観者ぶった、わがままな詩情」と切り捨て、「感覚を鋭くして、書きつづっている自分が、どんな眼で注目されているかも、まったく気づいてはいないのだ」と鋭く批判する。ここから垣間見えるのは、過去の自分を批評する語り手の「私」が、当時の自分に欠けていた書く自己を客観視するまなざしを、語りの現在において獲得しているという事実である。 4

そうした変化をもたらしたのは、やはり、つねに自分の言葉を聞き取る他者がそばにいる口述筆記の経験だったのではないか。 B は自らの声を通して C に文章を書かせるが、それは同時に、 D が最初の E として自らの発した言葉を読んでいるということの意味する。筆記者がその言葉をどのように受けとめ、筆記しているのかという内心が明らかにされることは少ない（むしろ、ほとんどの場合それは口述者の与り知らぬままである）。しかし、口述者の言葉は、筆記者の批評的な視線に晒される可能性をつねに潜在させている。こうした点に自覚的になることによって、語る現在の「私」は、他者を顧みることなく「自分一人で詩的になっているつもり」の過去の自己を厳しく否定し、「征服されようとしている大陸の住民たち、農民や職人や兵士たちの苦しい感情とは、どれほど、へだたっていたことだろうか」と、かつて自らの言葉が暴力的に排除していた他者の存在を、遅まきながらその自己批判の言葉のうちに呼び戻している。

書く自己と言葉との往還のなかに自閉するのではなく、その言葉を聞き、書き、読む人がいるという当たり前の事実を求むキヤクすることなく、自己の発する言葉を他者に開かれたものとして捉えること。『目まいのする散歩』というテキストは、口述筆記という方法を介した筆記者との協働的な営みを通して、他者と自己のあいだに築かれる書く行為と読む行為の倫理性にも触れ得る視点を提示しているのである。

問一 次の文章はある段落の最後の文章である。本文中の①②③④から最も適当な箇所を選び、その番号を記せ。

それは、能動と受動の二分法では切り分けられない書く行為の複雑性をはらみつ、〈する〉と〈される〉のあいだを漂いながら書くというありようだといえるのではないだろうか。

問二 次の文章は傍線部 a「こうした文章」を説明したものである。

(1) が一人称で記した心情を (2) の一人称の文章に組み込むことで両者の語りが混在し、「私」という (3) 体が「彼女の主人」という (4) 体としても語られている、特殊な文章。

イ (1) (2) に入る人名を本文中からそれぞれ抜き出して記せ。

ロ (3) (4) に入る最も適当な語を本文中からそれぞれ一字で抜き出して記せ。なお、(3) と (4) は対義的な関係にある。

問三 傍線部 b「泰淳という書き手によって統制されている」とあるが、同じことを述べている部分を傍線部 b より前の本文中から十八字で抜き出し、その始めと終わりの三字を解答欄の形式に合わせて記せ。

問四 傍線部 c「語りの違和や不整合を繕わず、あえてそのままに保持する」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 一人称の文章と三人称の文章を両方使用することで、かえって読みやすい作品になると判断しているということ。
- 2 「私」の視点と他者の視点が入り混じる一貫性のない文章だが、一貫性のある文章に書き直しはしないということ。
- 3 百合子は自分の日記が泰淳によって不正確に読み上げられた場合も、不正確なまま書き留めているということ。
- 4 泰淳は百合子の日記を重視しているため、日記に間違いがあっても改変せずそのまま引用しているということ。
- 5 「私」に該当する人が泰淳なのか百合子なのか分かりにくい、泰淳自身が混乱しているため修正できないということ。

問五 傍線部 d「その変化」の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 妻という他者と出会った後には、高校時代の目標よりも困難な目標を二人で掲げ達成するようになったという変化。
- 2 高校時代に関心を持てなかった予測不能な冒険を、いつの間にか積極的に求めるようになったという変化。
- 3 自力で成長したいという高校時代の考え方から、人生には同伴者が必要であるという老成した考え方への変化。
- 4 他者の介入は自分にとって邪魔であるという認識から、他者と一緒に新たな経験ができるという認識への変化。
- 5 他者と二人旅をすることで未知の場所は減っていく、旅先で恐怖や快楽を味わうことがなくなったという変化。

問六 空白部 A に入る最も適当な語を次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 警句 2 比喩 3 仮説 4 反語 5 予言

問七 傍線部 e「過去の自分を批評する語り手の「私」とは誰か。最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 従軍記録に登場する「私」
- 2 ロシア旅行中の泰淳
- 3 百合子の日記を綴っている「私」
- 4 中国大陸の住民
- 5 『目まいのする散歩』の語り手

問八 空白部 B、C、D、E に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | B | 口述者 | C | 筆者 | D | 筆者 | E | 読者 |
| 2 | B | 口述者 | C | 筆者 | D | 読者 | E | 口述者 |
| 3 | B | 読者 | C | 筆者 | D | 口述者 | E | 筆者 |
| 4 | B | 筆者 | C | 口述者 | D | 口述者 | E | 読者 |
| 5 | B | 筆者 | C | 口述者 | D | 読者 | E | 口述者 |

問九 傍線部 f「自己」の発する言葉を他者に開かれたものとして捉えること」とはどういうことか。最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

1 日中戦争下の大陸の人々が内心で考えていたことについて、日本兵という立場を超えて聞き取り、書き残すべきだったと反省すること。

2 筆者や読者から寄せられる批評を他者の意見として受け止め、自己の言葉と他者の言葉が同じものとなるよう努力すること。

3 協働して書く他者、書く対象としての他者、文章から排除した他者にも読まれようと意識しながら、自分の文章を書くこと。

4 語るのは「私」であっても、それを読む他者は「私」の意図した意味にとらわれず自由に解釈できるという事実に向けること。

5 様々な立場の他者と詩情を共有するために、妻だけでなく多様な筆記者と協働し、自分の独善的な言葉を改善すること。

問十 武田泰淳は戦後派作家として知られるが、第二次世界大戦後に活躍した作家を次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

1 三島由紀夫 2 芥川龍之介 3 小林多喜二 4 宮沢賢治 5 梶井基次郎

問十一 傍線部イ、ホを漢字に直し、正確に記せ。

〔二〕

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

中納言石上鷹足^aの、家に使はるる男^{をこ}どものもとに、「燕^{つばくらめ}の、巢^ねくひたらば告げよ」とのたまふを、承りて、「何の用にかあらむ^b」と申す。答へてのたまふやう、「燕^cの持たる子安貝を取らむ料なり」とのたまふ。男ども答へて申す、「燕をあまた殺して見るだにも、腹になき物なり。ただし、子をうむ時なむ、いかでか出だすらむ、侍^cんなる」と申す。「人だに見れば、失せぬ」と申す。

また、人の申すやう、「大炊寮^{おほひづかさ}の飯炊^{いひかし}く屋の棟に、つかの穴^dごとに、燕は巢^eをくひ侍る。それに、まめならむ男どもを率てまかりて、足座^{あぐら}を結び上げて、うかがはせむに、そこらの燕^e、うまざらむやは。さてこそ取らしめ給はめ」と申す。中納言よろこび給ひて、「をかしきことにもあるかな。もつともえ知らざりけり。興あること申したり」とのたまひて、まめなる男ども二十人ばかりつかはして、麻柱^{あなはち}にあげ据ゑられたり。

殿より、使^{つかひ}ひまなく賜はせて、「子安¹の貝取りたるか」と問はせ給ふ。燕も、人のあまたのぼりゐたるに怖^{おそ}ぢて巢^ねにものぼり来ず。かかる由の返りごとを申したれば、聞き給ひて、「いかがすべき^f」と思しわづらふに、かの寮²の官人、くらつまろと申す翁申すやう、「子安貝取らむと思しめさば、たばかりまうさむ^g」とて、御前に参りたれば、中納言、額を合せて向ひ給へり。

くらつまろが申すやう、「この燕の子安貝は、悪^{わる}しくたばかりて取らせ給ふなり。さては、え取らせ給はじ。麻柱ⁱにおどろおどろしく二十人の人ののぼりて侍れば、あれて寄りまうで来ず。せさせ給ふべきやうは、この麻柱をこほちて、人みな退きて、まめならむ人一人を、荒籠^{あらこ}に乗せ据ゑて、綱を構へて、鳥の子⁴うまむ間に、綱を吊り上げさせて、（1）子安貝を取らせ給はむなむ、（2）と申す。中納言のたまふやう、「いとよきことなり」とて、麻柱をこほち、人みな帰りまうで来ぬ^k。

中納言、くらつまろにのたまはく、「燕は、いかなる時にか子うむと知りて、人をば上ぐべき」とのたまふ。くらつまろ申すやう、「燕子うまむとする時は、尾を捧^{さか}げて、七度めぐりてなむうみ落とすめる。さて七度めぐらむをり、引きあげて、そのをり、子安貝は取らせ給へ」と申す。くらつまろのかく申すを、いといたくよろこびて、のたまふ、「ここに使はるる人にもなきに、願ひをかなふることのうれしさ」とのたまひて、御衣ぬぎてかづけたまうつ。

*大炊寮……………宮内省に属する役所

**足座……………足場

***麻柱……………高い足場

問一 傍線部 a「の」と同じ意味の格助詞を傍線部 1 から傍線部 5 の中から選び、その番号を記せ。

問二 傍線部 b「む」、g「む」、k「ぬ」の助動詞の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ選び、その番号を記せ。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 1 命令 | 2 過去 | 3 完了 | 4 打消 | 5 意志 |
| 6 断定 | 7 可能 | 8 仮定 | 9 推量 | |

問三 傍線部 c「侍んなる」、f「思しわづらふ」、j「寄りまうで来ず」の主語を次の選択肢の中からそれぞれ選び、その番号を記せ。

- | | | | | | |
|--------|-----|-------|-------|-----|---------|
| 1 石上磨足 | 2 燕 | 3 子安貝 | 4 男ども | 5 使 | 6 くらつまろ |
|--------|-----|-------|-------|-----|---------|

問四 傍線部 d、i、m の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ選び、その番号を記せ。

- | | | | | |
|------------|----------|--------|--------|--------------------------|
| d まめならむ | | | | |
| 1 小柄な | 2 繊細な | 3 忠実な | 4 器用な | 5 愚かな |
| i おどろおどろしく | | | | |
| 1 仰々しく | 2 危なっかしく | 3 恐ろしく | 4 欲深く | 5 絶え間なく |
| m かづけ | | | | |
| 1 与え | 2 掲げ | 3 踊り | 4 頭を下げ | 5 頭に被り <small>なぶ</small> |

問五 傍線部 e「うまざらむやは」を十二字以内で現代語訳せよ。

問六 傍線部h「悪しくたばかりて取らせ給ふ」とは実際にどのようなにして取らせたことか。最も適当な箇所を傍線部hより前の本文中から二十五字以上三十字以内で抜き出し、その始めの五字を記せ。

問七 (1)に入る副詞として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|-----|---|----|---|------|
| 1 | いとど | 2 | ゆめゆめ | 3 | いかで | 4 | ふと | 5 | かたみに |
|---|-----|---|------|---|-----|---|----|---|------|

問八 (2)には、形容詞「よし」と助動詞「べし」がこの順序で接続したものが入る。それぞれを適当に活用させてひらがなで記せ。

問九 傍線部「ここに使はるる人にもなきに、願ひをかなふること」の解釈として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

1 くらつまろの仕事は寮と関係がないにもかかわらず、中納言に便宜をはかってくれること。

2 くらつまろは他人に仕えるような身分ではなかったのに、中納言に仕えてくれたこと。

3 功績が認められた結果、中納言に仕えたいというくらつまろの希望がかなえられたこと。

4 くらつまろは中納言の使用人ではないのに、中納言の望みに応えようとしてくれること。

5 中納言のために働いてくれる家来がないなか、くらつまろは子安貝を取ってきてくれたこと。

問十 次の各項について、本文の内容と合致するものには1を、合致しないものには2をそれぞれ記せ。

1 中納言が家来の提案した方法を実行したところ、燕はおびえて自分の巢に近寄らなかつた。

2 家来たちを信じて失敗した中納言は、くらつまろという老人に会って話を聞くことをためらつた。

3 くらつまろは中納言を欺こうと考え、子安貝の捕り方をより簡単だが誤つた方法に変更させた。

4 新たな方法は、巢の燕が七度回るときに、荒籠に乗った一人が子安貝を取るといったものだった。

5 子安貝を手に入れることができた中納言は大変喜び、居並ぶ人々に見事な舞を披露した。

11

B

二〇二五年度

国

語

問題冊子（二～九ページ）

注意事項

- (一) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- (二) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。
- (三) 解答は別に配付する解答用紙の該当欄に正しく記入すること。ただし、解答に関係のない語句・記号・落書き等は解答用紙に書かないこと。
- (四) 解答用紙左下に印刷してある受験学部・学科コード、受験番号、氏名(カタカナ)を確認し、氏名欄に氏名(漢字)を記入すること。もし、印刷に間違いがあった場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。

〔解答用紙記入例（選択式の場合）〕

- 例一．〔語群〕が二桁で
- 11 大阪
- 12 佐賀
- 13 長崎
- 14 東京とある場合
- 例二．〔語群〕が一桁で
- 1 大学
- 2 中学校
- 3 高校
- 4 小学校とある場合

問 X	
16 / 2	A
18 / 4	B
20 / /	C

問 X	
51 /	a
52 4	b
53 2	c

〔一〕

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

話したい気持ちがあるのに、話せない。これはたとえば、日本の英語学習者にもあることで、英米語学科の学生の多くは「英語は好きだけど得意ではない」などと言う。^a謙虚とも言えるが、おそらくそれ以上に自信がない。自信がもてるような確実な英語学習ができていないのかもしれないし、自分の母語ではない言語、直観がきかない言語にそうそう自信がもてるということはないのかもしれない。とはいえ、私たちの多くは英語を、外国語あるいは国際語として、学びはじめる。ここにおいて英語は、自分にとっていわば距離のある言語であり、たとえば話せないことに責任など感じなくてもよい。

ところが、アイルランド人にとって、アイルランド語はそうはいかない。「アイルランド語は美しいことばだけれども自分は話せません」とアイルランド人が言うとき、そのセツジツ^イさは果てしない。「恥ずかしいけれど、私はアイルランド語が上手ではありません」と、^c恥ずかしさの前置きを置かなくてはならない事情がある。「民族」が言語と結びつくとき、その言語のもつ意味はとたんに重くなる。アイルランドの人々の多くは、「自分たちのことば」であるところのアイルランド語が話せない。民族のことば、^d自分の国でもっとも話されることばが^e自分の母語ではないということが、^ロ心に^クフ力^ロをかけるようにみえる。

母語は「人間が生まれてから一定期間触れていること」によって自然に身についた言語^xの意味で用いるのがふつうである。ところが、アイルランドにおいては、「母語」が話者の意識において、もうひとつの意味、すなわち「母なることば」の意味をもつことを考えに入れておく必要がある。

アイルランドに暮らす人は、アイルランド語を言い表すのに、ときに「私たちの母語」と言うことがある。とはいえ、実際には母語話者としての話す能力があるわけではないことが多いから、その意味合いは「私たちの母なることば^y」に近いものになるのかもしれない。一般にアイルランド人は英語のネイティブ・スピーカー^zないし母語話者とされるが、アイルランドのネイティブ言語、土着のことばはアイルランド語なのである。言語能力と言語をめぐるアイデンティティに、いわばねじれが生じている状態にある。「母なることば」が母語ではない。

こう書きながら、『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』という、ジャック・デリダの本のタイトルを思い出した。デリダはフランス植民地下のアルジェリアでユダヤ系両親のもとに生まれた。言語をめぐるデリダの思考は、みづからの出自をこえて、言語が普遍的、本質的にもつ、言語的主体からの分離、非帰属性をも問うものであるが、「私はひとつの言語しかもっていない、ところがそれは私の言語ではない」という言語をめぐる経験は、ポストコロニアルに生きる人々の母語の非帰属性とアイデンティティの問題を明るみに出す。ほかの誰かのことばを話す自分は何者なのか。アイルランド人はアイルランドにおいてマジヨリティであつても、彼らの言語体験もここに重なるのであろうか。それともその言語的ソガイ感や悲しみを乗り越えて、あるいは麻痺させて、ことばは道具だと割り切つて、英語をもつて生きているのであろうか。

英語が母語であるという恵みをキョウジュしながら、アイルランド語を「自分たちのことば」としてコジしながら現代を生きているアイルランド人——こうしたとらえかたは、水村美苗の『増補 日本語が亡びるとき——英語の世紀の中で』にうかがえる。日本語が国語として機能するこれまでの過程の詳細を文学にたいする独自の分析とあわせて描き、日本における英語のありかたを考えさせてくれる。力強く、魂をこめて語られる文章に、読みごたえの弾力はふつうではない。

水村は、その一節で、『想像の共同体』で知られるベネディクト・アンダーソンがアイルランド人の父とイギリス人の母の間に生まれアイルランドの国籍をもつということに触れて、アイルランドのバイリンガリズムについて述べている。「アイルランドは、最終目標として、二重言語国家を目指しているのであつて、英語を捨て、アイルランド語を国民の〈母語〉にしようとしているのではない」ことを確認したうえで、つぎのように語る。

思うに、アイルランドの自国語保護政策は世界で一番ぜいたくなものである。宮殿に住んでいる人間が、庭の隅に^{*}苦屋を建て、そこで風流な生活をして心の安らぎを見いだすようなものである。

わたしはこれを読んで、複雑な気持ちになる。彼らはそんなにも心の安定を得ているだろうか、少なくとも、自分たちの言語

に関して、自分たちの民族的アイデンティティにおいて。あるいは、英語を手に入れて、時間が流れ、暮らしが豊かになった今になって、都合よく、あるいはやや懐古的に、自分たちが失ったものを嘆くことによつて自分たちの帰属意識をよび覚ましているというのだろうか。

「宮殿に住んでいる人間が、庭の隅に苦屋を建て、そこで風流な生活をして心の安らぎを見いだすようなもの」。静かに言葉をなんどもたどつてみる。傍目^{はため}にみればそう映るだろうか。いや、じつさいにそういった側面もあることは否めない。でも、わたしが現地で見てきたことは、そういうものだけではない。現実として、もがいている人たちがいる。ことばをめぐる人々の態度と感情、とくにゲールタハト^{**}の実態に触れるとき、アイルランドの人々が（ ）をしているようにはどうしても思えないのである。

——嶋田珠巳「英語という選択——アイルランドの今」による——

* 苦屋^{とまや}……………苦(スゲやカヤなどの植物)で屋根をふいた家。

** ゲールタハト…………アイルランド語使用地域。保護のためアイルランド語の使用が推奨されている。

問一 作者はどのようなことを傍線部aのように評しているのか。最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 英語が話したいにもかかわらず、実際には話せないこと。
- 2 英語が好きだという理由だけで、英米語学科に進学したこと。
- 3 英語が得意でないにもかかわらず、英語が好きだと公言すること。
- 4 ある程度英語が話せたとしても、得意ではないと言うこと。
- 5 自信を持てるような英語学習ができていないこと。

問二 傍線部bの理由として最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 英語を好きなことと得意なことには直接的な関係がないから。
- 2 英語が話せないことは、日本の英語教育の失敗によるものだから。
- 3 英語を話せなくても、民族のつながりが失われることがないから。
- 4 今や英語は国際的に話され、民族との距離はどんどん隔たっているから。
- 5 アイルランドでは英語を公用語にしているが、日本では公用語にしていないから。

問三 傍線部cについて。アイルランドにおける言語の使用状況を最も具体的に述べた一文を本文から抜き出し、その最初の三字を記せ。

問四 傍線部d、eが指すものについて、波線部X、Y、Zはどちらに当てはまるか。dに当たる場合は1、eに当たる場合は2を記せ。

問五 傍線部fは具体的にどういうことか。最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 かつて植民地化された土地では、複数の言語が話され、自身の帰属意識に揺らぎが生じるということ。
- 2 かつて植民地化された土地であっても、英語という国際語を学ぶことで将来の可能性が開けること。
- 3 かつて植民地化された土地で、自然に獲得した言語が、その土地の土着言語ではないということ。
- 4 植民地化後に新たに入ってきた言語が、その土地の人々になかなか受け入れられないこと。
- 5 植民地化後には、土着の言語に民族意識を見出し、普遍的な価値が生まれるということ。

問六 傍線部gの人物は、夏目漱石の死によって未完に終わった小説の続編を創作したことで知られている。漱石のその小説の題名を次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 明 暗
- 2 草 枕
- 3 行 人
- 4 こころ
- 5 それから

問七 傍線部h、iは、直後の引用ではそれぞれ何にたとえられているか。抜き出して記せ。

問八 傍線部jの内容に最も近いものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 アイルランドの政策についての的を射た批判を読み、著者は複雑な気持ちになっている。
- 2 古き良きアイルランドの生活を思い出すことによって、アイルランド語へ民衆の意識を向かわせようとしている。
- 3 民族的アイデンティティを失うことによって、かえって自分達は何者であるかを明らかにしようとしている。
- 4 言語と民族に生じたねじれを解きほぐすことによって、民族的アイデンティティの復権を図ろうとしている。
- 5 日常でアイルランド語が使えないことによって、かえってそこに民族としての象徴を見いだそうとしている。

問九 ()に入る最も適当な言葉を四字で抜き出して記せ。

問十 本文の内容に合致するものを、次の選択肢から二つ選び、その番号を記せ。

- 1 アイルランド人は自然に身につけた言語でないアイルランド語を、自分たちの「母語」と意識することがある。
- 2 アイルランド人はアイルランド語を話せないため、そこに自分たちのアイデンティティを見いだしていない。
- 3 ジャック・デリダはフランス植民地下のアルジェリアで生まれたが、土着の言語を習得する機会に恵まれた。
- 4 アイルランド語はイングランドの植民地支配によって禁止され、英語話者がマジョリティとなっている。
- 5 ベネディクト・アンダーソンは、アイルランド国籍を持ちながら、アイルランドの言語政策について批判した。
- 6 アイルランド人は英語が母語であるという恩恵を受ける一方、その言語状況に苦しんでもいる。

問十一 傍線部イ、ホを漢字に直し、正確に記せ。

〔二〕

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、文徳天皇の御代に、新羅国に仰せ遣はすことを（　　）、大臣・公卿、詮議されて言はく、「かの国は、この朝に従ふべき由を申しせりき。しかるに、かく仰せ遣はすことを用ゐねば、^a末代にはあしかりなむ。しかれば、速やかに軍を調へて、かの国を討たるべきなり」と定められて、その時、鎮守府の將軍、藤原利仁といひける人をかの国に遣はしけり。利仁、心猛くしてその道に達せる者にて、この仰せを承りて後、心を励して出で立つ間、多くの猛き軍どもを数知らず多くの船に調へ乗せらる。

しかる間、かの新羅にこの事を知らず。それに、この事によりて、様々の物の怪しありければ、占はするに、異国の、軍起こりて来たるべき由を占はせ申しければ、その国の国王より始め、大臣・公卿、驚き騒ぎて言はく、「異国より猛き軍おこりて我國に來たらむに、手向へして支ふべき様なし。しかれば、ただ、^c如かじ、^d三宝の靈驗を深く頼むべきなり」と定めて、大唐國にまします法全阿闍梨といふ人あり、惠果和尚の御弟子として、真言の密法を受け伝へて、^eやむことなき聖人なり。たちまちに、その人を請じて、調伏の法を行はしむ。

その時に、三井寺の智証大師は、若くして唐に渡りて、この阿闍梨を師として真言習ひておはしけるが、^fそれとともに新羅に渡りておはしけれども、我が国の事によりてとも、いかでかは知り給はむとする。しかる間、調伏の法、すでに七日に満ちぬる日、壇の上に血多くこぼれたり。阿闍梨、「必ず、法の驗あるべきなり」と言ひて、結願して、もとの唐に歸りにけり。^g

しかるに、利仁の將軍出で立つ間、山崎にして病つきて伏したりける間に、^hにはかに起き走りて空に向ひて太刀を抜きて、踊り上り踊り上り、度々切りけるほどに、倒れて死にけり。しかれば、他人をまた遣はす事もなくて止みにけり。ⁱ

その後、智証大師、唐よりこの朝に歸り給ひて、新羅に渡りし事を語り給ひけるを聞きてなむ、^jこの国の人、「さは、利仁の將軍の死にし事はその調伏の法の驗によりてなりけり」と知りけれ。

これを思ふに、利仁將軍も、いと、^kただ人にはあらずとなむ思ゆる。しか空に向ひて切りけむは、定めて、目に見えけるにこ

そはありけめ。しかれども、法の験いちじるきがゆゑに、忽ちに死^しぬるなりけりとなむ語り伝へたるとや。

——「今昔物語集」——

* 鎮守府……………陸奥・出羽など東北の蝦夷を鎮定するために設置された官庁。

* * 物の怪^{さと}し……………異変。不可思議な前兆。

問一 () には動詞「用ゐる」に、打消の助動詞「ず」、過去の助動詞「けり」、接続助詞「ば」が順に接続したものが入る。適当

な形に活用させた上で、解答欄に合わせて平仮名で記せ。

問二 傍線部 a を十五字以内で口語訳せよ。

問三 傍線部 ア、ウの指す内容として最も適当なものを選択肢から選び、その番号を記せ。

ア				
5	4	3	2	1
日本への道	新羅への道	交渉ごとの道	合戦の道	和歌の道
イ				
5	4	3	2	1
智証大師	恵果和尚	法全阿闍梨	大臣・公卿	藤原利仁
ウ				
5	4	3	2	1
唐	陸奥	高句麗	新羅	日本

問四 傍線部 b、d、e の意味として最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

b														
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
宴会	歓迎	抵抗	協力	祈祷 ^{とう}	明らかにする	楽しむ	頼りにする	頼りにさせる	依頼する	珍しい	並々でない	気むずかしい	やむをえない	追求心を持った

問五 傍線部 c の「如^しかじ」は「まさるものはない」という意味で、話し手のある決断を表している。その決断の内容を表す部分として最も適当な箇所を十字で抜き出して記せ(句読点は含まない、以下同じ)。

問六 傍線部 f の解釈として最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 日本のせいで新羅に来ているとは、智証大師がどうしてお分かりになるだろうか
- 2 日本のために密法を習っているとは、智証大師がどうしてお分かりになるだろうか
- 3 新羅のために調伏をしているとは、大臣・公卿がどうしてお分かりになるだろうか
- 4 新羅のせいで山崎で病気になったとは、利仁将軍がどうしてお分かりになるだろうか
- 5 唐のせいで新羅に来ているとは、法全阿闍梨がどうしてお分かりになるだろうか

問七 傍線部 g は何を暗示しているか。暗示されている内容の主語と述語を含む箇所を十字で抜き出して記せ。

問八 傍線部 h の「に」と文法的に同じ意味のものを本文中の 1 ～ 5 の中から選び、その番号を記せ。

問九 傍線部 i の解釈として最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 智証大師以外の人を、利仁将軍の病を治すために派遣することもなくなった。
- 2 智証大師以外の人を、真言を習いに唐へ派遣することもなくなった。
- 3 法全阿闍梨以外の人を、調伏のために新羅へ派遣することもなくなった。
- 4 利仁将軍以外の人を、智証大師のもとに派遣することもなくなった。
- 5 利仁将軍以外の人を、新羅の討伐に派遣することもなくなった。

問十 傍線部 j のように思った理由として最も適当なものを次の選択肢から選び、その番号を記せ。

- 1 調伏が行われた日、利仁将軍が何者かを切ろうと空に太刀を抜いていたため。
- 2 新羅で行われた調伏によって、日本にいた利仁将軍が病死したため。
- 3 利仁将軍が死んだ日に披露した舞があまりに優美なものであったため。
- 4 山崎で死んだと思われた利仁将軍が、実は新羅の智証大師と会っていたため。
- 5 利仁将軍は法全阿闍梨の調伏をもとめず、新羅を討伐したため。

問十一 本文の内容に合致するものを、次の選択肢から一つ選び、その番号を記せ。

- 1 三井寺の智証大師は、日本への帰国後、利仁将軍を殺したことを吹聴^{ふいちやう}してまわった。
- 2 三井寺の智証大師は、僧侶でありながら、利仁将軍と決闘することになった。
- 3 三井寺の智証大師は、新羅で行った調伏の成果により、新羅で英雄視された。
- 4 三井寺の智証大師は、図らずも、日本の新羅への侵略を止めることになった。
- 5 三井寺の智証大師は、新羅の謀略を阻止するため、唐から新羅へ潜入した。

12

B

二〇二五年度

国

語

問題冊子（二～二ページ）

注意事項

- (一) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- (二) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。
- (三) 解答は別に配付する解答用紙の該当欄に正しく記入すること。ただし、解答に関係のない語句・記号・落書き等は解答用紙に書かないこと。
- (四) 解答用紙左下に印刷してある受験学部・学科コード、受験番号、氏名（カタカナ）を確認し、氏名欄に氏名（漢字）を記入すること。もし、印刷に間違いがあった場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。

〔解答用紙記入例（選択式の場合）〕

例一．〔語群〕が二桁で	11 大阪
13 長崎	12 佐賀
14 東京	とある場合

問 X	
16 /	17 2 A
18 /	19 4 B
20 /	21 / C

Aの解答が佐賀の場合
Bの解答が東京の場合
Cの解答が大阪の場合

例二．〔語群〕が一桁で	1 大学
3 高校	2 中学校
4 小学校	とある場合

問 X	
51 /	a
52 4	b
53 2	c

aの解答が大学の場合
bの解答が小学校の場合
cの解答が中学校の場合

〔一〕

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

花咲き、実り、紅葉して、ついには葉を落とす草木。季節の到来を告げて歌い、渡り来て過ぎまた帰る鳥たち。風とともに舞い、地に棲^すんで草のかげに鳴く虫たち。霞^{かすみ}立ち、陽炎燃え、梅雨の長雨の後には炎暑、そしてソウカイな雷鳴¹につづく驟雨^{しゅうう}、野分の荒い風が吹き、時雨はわびしく降り、木枯らしすさび、きよらかな白い雪。四季は折々の変化に富み、また年ごとに巡り変わって改まる。日本人が季節の節目節目をきめ細かに味わい楽しむべに長^たけるようになったのも、時の移ろいの階調がなだらかで、微細なあやに富んでいるからこそである。その時、その季節に特有の事物を重んじ、そうした特定の景物やAを契機として一定の感覚や感情が共通して喚起されうるという前提の下に、世界でもまれな極端なほどの短詩形式である和歌や俳句が成立した。それと同じ傾向が、美術にも及んでいることは言うまでもない。とかく含蓄に頼るBな描写にとどまりがちなのだ。

日本には、厳密な意味での人跡未踏の地はほとんどない。原始林、原生林といったものも皆無ではないがまれだろう。Cと思われる山間の奥地にも、なにがしかの人の手が及んでいるという。自然それ自体が手入れされた自然といった趣をもっており、言ってみれば人間^aにとって有用な、親しい存在にまで整えられているのである。

いわば、詩的で、美的な人生を営むためにふさわしい「舞台」として、あるいは私たちと共演する重要な「役者」そのものとして、本来は荒ぶれた自然もおとなしく飼^かい慣^ならされてきた感がある。自然を敵対するものとして遠ざけるのではなくて、身近に親しく引き寄せずにはいられない日本人の態度は、開放的な住宅の室内空間をさらに自然と親和的な主題の障屏画^{しょうへいが}で飾り、自然のミニチュアとして意識的に整備した庭から、さらに外側の自然景観までもを借景として抱え込むというように、自然尽くしの生活環境を作り出したものである。

そして、目に触れる山野や河川の景観から草木花鳥虫魚走獣の類、気象の変化や朝暮昼夜の別まで、それこそ「花鳥風月」という感覚の領域の友として、詩歌や絵画の背景とし、時には主役そのものとして登用するのであった。Dを

もとより、人間の生活、それも人生と季節、さらには流行といった、さまざまな移ろいの相の中での感覚優先の生活風俗が、主題として大きな比重を占めてきたことも、日本美術の忘れがたい特質として、留意される。

私的な日記や紀行文、また小説でもいわゆる私小説が、文学の重要な領域として発達してきた日本にあつては、かつて明治の洋画家黒田清輝が悩んだように、重層的な主題を仮構しての構想画というようなシンコクな表現は向きでなく、男女の恋の場を寸景としてしつらえたり、世態風俗の報告を試みるなど、絵に描かれる人生模様は単純明快で、複雑な陰影に欠けるものがある。風俗的絵画を好んだのは何も江戸時代の浮世絵ばかりではなく、遺品の例は少ないとはいえ平安の昔から大和絵方面での目立った特徴とさえいえるのだ。

こうした、人間の生活と親しい自然や風俗を主題として、文学世界ともなじみつつ日常性のただ中で造形の美を紡ぎ出してきた日本人の特質は、隣の文化大国である中国の人にもすでに早くから注目されている。

北宋の末の徽宗皇帝が所蔵する絵画を詳細に記録した、『宣和画譜』という全二十巻の著録がある。宣和二年（一一二〇）の序文があり、日本では平安時代末の院政期に当たる時期の著述になるものと考えられるが、その巻十二「山水 三」の最末尾に、日本の絵画に関する短い記述が付されている。本格的な中国の画史画論書の中で、日本の美術がはじめてまともな評価の対象となつたのであり、その一言一言が気にかかる。有名な件だが、その主要な部分を意識しておこう。

日本国は、古の倭奴国のことである。日の出る所に近いということで、日本と国の名を改めた。絵画をつくるが画家の姓名は知られない。その国の風物や山水の小景を写し、設色はなはだ重く、多くは金碧きんぺきを用いる。真をとらえることはいまだ十分でないが、彩色があざやかで、見た目の美しさを取ることにすぐれている。描かれるのは、異境異域の風景であり、人物風俗である。辺境の未開人で、正しい礼の道も及ばない地にあつて、よく絵の事に意をとどめるとは、また尚たつとぶべきことである。

太平興国年間に日本の僧侶一行五、六人が、商船に乗ってやって来たが、中国語の会話は通じず、是非なく文字を書くこ

とよつてその風土のことを尋ねた。書は隸書体を用い、言語はおおむね中国のそれを範としていた。その後再び彼らの弟子を遣わしてきて表敬することがあり、金蒔絵まきえの硯箱すずり、鹿毛の筆、そして倭画やまとえの屏風びょうぶを献上した。いま宮中には、倭画屏風三点が所蔵されている。すなわち、海山風景図一点、風俗図二点。

日本の海山の風景や日本人の風俗を描いた和様いちじるしい金碧障屏画に飾られた室内の情景は、『宣和画譜』の序文が記されたのとはほぼ同じ頃の作画にかかる「源氏物語絵巻」柏木二、宿木一、東屋一などの諸段の絵により、確かめることができる。「華夏」ないし「中州」と彼らが誇る中国の「礼儀」はたしかに正しく及ばなかったとしても、みずからdの生活環境を、好ましい作風と、親しい主題の絵で、美しく飾って楽しむことには、すでに十分に慣れていたものである。

その障屏画、すなわち襖絵ふすまえとか屏風絵とかは、本来建具とか調度としての日用の具であり、格別に改まって美術作品とあがめられてまつるべき素性のものではけつしてない。例にあげた「源氏物語絵巻」でも、現在でいえば絵入りの書物というものであつて、『源氏物語』という長編小説をダイジェスト版にした豪華な仕立ての特製本というほどのものであつた。

こうした、生活の場における実用性をもたされ、日常平生の慰安と娯楽に供された美術品こそが、宗教美術を除いた過半の日本美術、すなわち世俗美術にあつては、堂々と主流の座を占めてきたのである。これをたとえば、西洋にあつてよくするように、純粹に造形の美を追求する美術と、生活への有用性が優先される工芸、それに写本や版本、版画を一括した広義の図書とに三分しようとしたなら、世俗美術の内の国宝、重要文化財のほとんどは、本来の機能に従わせれば、E の分類に収まつてしまうことだろう。日本美術は、先に見たような主題面のみならず様態そのものとしても、かくも日常性に深く関わり、工芸的性格を色濃く備えもつものである。

本来の機能を停止、中断して、中ぶらりんの状態のままに放置された美術品の例もある。日常性からの浮遊状態に置かれたと言えよいか、それらの多くは、実用よりも裝飾的な効果が尊重され、美しい外観が保存の対象となつて伝わったものである。

尾張徳川家に嫁いだ徳川三代將軍家光の長女千代姫のための「初音蒔絵婚禮調度」はその典型的な例で、幕府御用の蒔絵師幸阿

弥長重の工房が足かけ三年の年月をかけて調えたというボウダイな数の婚礼調度品も、言葉の厳密な意味での実用には供されることなく、権威と富の象徴として室内に飾り置かれることが優先されてきたものである。おかげで今もなお、江戸時代初頭の時絵工芸の最高度の水準が大小無数の調度品を具体例として遺漏なく見渡せるのであり、これも実用品が実用から切り離されたゆえの余慶なのである。

日常の生活において、実用よりも装飾をこそ重んじようとする性向は、ことさら日本人のみに特有のものではもとよりないが、現代の私たちにまで脈々と伝わっているところのものだ。「棚飾り本」と俗称される絵巻物や画帖がしやうがあるが、それらは、外観の美麗を重んずるばかりで、中味の「源氏物語絵」や「伊勢物語絵」などは様式のコウチヨクした陳腐なものとおりが決まっている。うわべを飾って質を問わないこれらの絵画作品の多くは、明治の開国以来海を渡って欧米の美術館、図書館に収められていることが多い。調査の折にそれらに出会って、日本人たるわが身のセンパクを反映されたような気恥ずかしさに襲われることがあるが、すぐに「これはいわゆる棚飾り本で、元々の用途が外面の装飾にこそあったのだからやむを得ないのだ」と、自分で自分を納得させようやく気を取り直すこととなる。まさに、

F

的美術品の最たるものといえるだろう。

——小林忠「江戸の絵画」による——

問一 空白部Aには、「梅」や「鈴虫」のような俳句に詠み込まれるものを指す言葉が入る。最も適当なものを漢字二字で記せ。

問二 空白部Bに入る最も適当な言葉を次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 1 過激 | 2 奇抜 | 3 正確 | 4 淡泊 | 5 不純 |
|------|------|------|------|------|

問三 空白部C・Dに入る最も適当な言葉を次の選択肢の中からそれぞれ選び、その番号を記せ。

- | | | | | | |
|--------|----------------------------|--------|--------|--------|--------|
| 1 海千山千 | 2 古色蒼然 <small>そうぜん</small> | 3 山紫水明 | 4 深山幽谷 | 5 森羅万象 | 6 風林火山 |
|--------|----------------------------|--------|--------|--------|--------|

問四 傍線部 a「人間にとって有用な、親しい存在にまで整えられている」の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 自然をありのままに受けとめ、絵画の主題にし、造形の美を生みだすこと。
- 2 自然に手を加え、人間が文学的な生活を送ることができるよう試みることに。
- 3 人間にとって役立つ形に自然を変化させ、身近なものとして利用すること。
- 4 詩的で、美的な人間社会の構築を目的にして、自然の中で暮らそうとすること。
- 5 自然との共生のため、自然をそのままの形で実生活の中に受け入れること。

問五 次の文章は傍線部 b「日常性のただ中で造形の美を紡ぎ出してきた日本人の特質」を説明したものである。(1)・(2)に入る最も適当な言葉をこの傍線部より前の本文中から抜き出し、(1)は七字、(2)は六字で記せ。

日本において、人々は、自然を自らの環境と一体化させ、親しい存在とすることで、単なる対象ではなく、(1)と見なしてきた。そして、この自然と、(2)のような自らのありのままの感覚が投影された生活風俗を、絵画の主題として用いてきた。こうした身近で日常的なものに対する強い意識の中で、さまざまな美が発見されてきた。

問六 傍線部 c「異境異域の風景」とは何か。最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 日本の風景
- 2 中国の風景
- 3 日常的な風景
- 4 空想の風景
- 5 粗野な風景

問七 傍線部 d「みずからの生活環境を、好ましい作風と、親しい主題の絵で、美しく飾って楽しむことには、すでに十分に慣れていた」の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 日本人は、日常生活と関わりの深い風俗や自然を主題とした絵画を描き、美を見いだそうとし続けてきた。
- 2 中国における社会規範と比べれば劣ってしまうものの、日本には日本なりの優れた要素が存在し続けてきた。
- 3 日本では、室内にとどまらず、庭やその外側の空間まで含め、自然との関わりを保とうとし続けてきた。
- 4 自らが暮らす室内に華美な装飾を施し、色鮮やかな絵画で飾ることで、日本人は豊かな暮らしを続けてきた。
- 5 日本においては、自然の風景だけでなく、依頼主のもとにに応じて、生活風俗までも描き続けられてきた。

問八 空白部Eに入る最も適当な言葉を次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- | | | | | |
|------|------|---------|---------|---------|
| 1 美術 | 2 図書 | 3 美術と工芸 | 4 美術と図書 | 5 工芸と図書 |
|------|------|---------|---------|---------|

問九 傍線部e「実用品が実用から切り離されたゆえの余慶」とはどういうことか。最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 蒔絵という実用のための技法が、装飾にも用いられるようになった変化のこと。
- 2 実用としての側面がそぎ落とされ、何の価値もなくなってしまったという帰結のこと。
- 3 実用品とは別に、室内を飾るための美術品が制作されるようになった喜びのこと。
- 4 実用品が美術品としても評価されるようになった、芸術家として祝うべき事柄のこと。
- 5 実用品としての要素が弱められ、他の要素が強められたことによる恩恵のこと。

問十 傍線部f「実用よりも装飾をこそ重んじようとする性向」の具体例として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 ほとんど同じ内容が書かれた本をいくつも買うこと。
- 2 読みもしないのに金銀で彩られた文学全集を本棚に飾ること。
- 3 図書館に誰も読まないような古い本を収蔵しておくこと。
- 4 変化のない固定化した構図で絵画を描き続けること。
- 5 豪華で重厚な彫刻装飾が施された本棚に本を収めること。

問十一 空白部Fに入る最も適当な言葉を次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 1 感覚 | 2 自然 | 3 人間 | 4 工芸 | 5 典型 |
|------|------|------|------|------|

問十二 傍線部イゝ木を漢字に直し、正確に記せ。

〔二〕

次の文章は「蜻蛉日記」の一節である。来訪の途絶えていた兼家が、作者の道綱母のもとへ久しぶりに顔を見せた場面から始まる。読んで、後の設問に答えよ。

十二月の一日になりぬ。七日ばかりの昼、さしのぞきたり。^a 今はいとまばゆき心地もしにたれば、几帳引き寄せて、気色もの^b しげなるを見て、「いで、日暮れにけり。内裏より召しありつれば」とて立ちにしままに、訪れもなくて、十七、八日になりけり。

今日の昼つかたより、雨いといたうはらめきて、あはれにつれづれと降る。まして、^c もしやと思ふべきことも絶えにたり。いにしへを思へば、我がためにしもあらじ、心の本性にやありけむ。雨風にも障らぬものとなら^d はしたりしものを、今日思ひ出づれば、昔も心の緩^{ゆる}ぶやうにもなかりしかば、我が心のおほけ^e なきにこそ

A

。あはれ、障らぬものと見しものを、それまして思ひかけられぬと、眺め暮らさる。

雨の脚、同じやうにて、火ともすほどにもなりぬ。^{*} 南面にこのごろ来る人あり。足音すれば、「さにぞあなる。^f あはれ、をかしく来たるは」と、沸きたぎる心をばかたはらにおきて、うち言へば、年ごろ見知りたる人、向かひみて、「あはれ、これにまさりたる雨風にも、
B は、人の障りたまはざめりしものを」と言ふにつけてぞ、うちこぼるる涙のあつくてかかるに、おぼゆるやう、

思ひせく胸の^g 焰はつれなくて涙をわかすもの^{**} にざりける

と、くりかへし言はれしほどに、寝る所にもあらで、夜は明かしてけり。その月、三度ばかりのほどにて、年は越えにけり。そのほどの作法、例のごとなれば、記さず。

さて、年ごろ思へば、などにかあらむ、^h 一日の日は見えずしてやむ世なかりき。さもやと思ふ心遣ひせらる。未の時ばかりに、^{**} 先追ひののしる。「そそ」など、人も騒ぐほどに、ふと引き過ぎぬ。「急ぐにこそは」と思ひかへしつれど、夜もさてやみぬ。つとめて、ここに縫ふ物ども取りがてら、「昨日の前渡りは、日の暮れにし」などあり。いと返りごとせま憂けれど、「なほ、年

の初めに、腹立ちな初めぞ」など言へば、少しはくねりて、書きつ。かくしも安からずおぼえ言ふやうは、「このおしはかりし近
江になむ文通ふ、さなりたるべし」と、世にも言ひ騒ぐ心づきなさになりけり。***

*南面……………南に面した部屋。道綱母の妹が住んでいる。

*ものにざりける……………「ものにぞありける」の略。

***先追ひ……………先払いのこと。貴族が外出する際、道の前方にいる人々を追い払って警護する人。

***このおしはかりし近江になむ文通ふ……………道綱母が予想したとおり、兼家が近江という女性に手紙を送っている状況のこと。かつて、道綱母は、兼家が近江と恋仲になっていたのではないかと疑ったことがあった。

問一 傍線部 a「今はいとまばゆき心地もしにたれば」の解釈として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 道綱母は、訪れることのなかった兼家とは顔を合わせたくないと思っている。
- 2 道綱母は、来訪することがない兼家に対し、自分との身分差を痛感している。
- 3 道綱母は、兼家の輝くばかりの美しさを改めて目にして非常に驚いている。
- 4 道綱母は、久しぶりに兼家と会うことから、今だけは照れくさく思っている。
- 5 道綱母は、昼間の太陽の光がまぶしくて、人と会いたくないと感じている。

問二 傍線部 b「ものしげなる」、e「おほけなき」、k「安からず」の意味として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

b				
5	4	3	2	1
にぎやかそうな様子	うれしそうな様子	苦しそうな様子	不機嫌そうな様子	うるさそうな様子
e				
5	4	3	2	1
弱く無様なこと	休む暇もないこと	身の程知らずなこと	穏やかな気持ちのこと	いい加減なこと
k				
5	4	3	2	1
難しく考えながら	心穏やかでなく	品格に欠けつつ	慌ただしくして	安物ではないように

問三 傍線部 c「もしやと思ふべきこと」とは具体的に何を指すか。最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 兼家が訪れること。
- 2 昔のようになること。
- 3 雨が上がること。
- 4 内裏に招かれること。
- 5 涙があふれること。

問四 傍線部 d「ならはしたりしものを」の文法的説明として適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 動詞の未然形＋過去の助動詞の連用形＋完了の助動詞の連体形＋接続助詞
- 2 動詞の連用形＋完了の助動詞の連用形＋過去の助動詞の連体形＋接続助詞
- 3 動詞の連用形＋断定の助動詞の連用形＋完了の助動詞の連体形＋接続助詞
- 4 動詞の連用形＋断定の助動詞の連用形＋過去の助動詞の連体形＋接続助詞
- 5 形容詞の連体形＋過去の助動詞の連体形＋接続助詞

問五 空白部 A には動詞「あり」に助動詞「けり」が接続したものが入る。適当な形に活用させてひらがなで記せ。

問六 傍線部 f「あはれ、をかしく来たるは」とあるが、なぜ、このように述べたのか。最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 南面の人の所に、男が慌ただしくやって来るのではなく、足音を立てないようにして訪れたから。
- 2 自分の所ではなく、南面の人の所にやって来た兼家に対し、皮肉を言いたくなったから。
- 3 昼間の仕事が終わった後、夜になって、そのまま通ってきた男の熱心さに感動したから。
- 4 南面の人の所に、毎日毎日、熱心に通ってくる男の行動をすばらしいものだと感じたから。
- 5 訪れることのなかった兼家とは違って、南面の人の所に雨の中を訪れた男の行動を評価したから。

問七 空白部 B に入る最も適当な言葉を本文中から四字で抜き出して記せ。

問八 傍線部 g「胸の焰」とは何を指すか。最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 兼家に愛されることを願いながらも、訪れることがない兼家に対する苦しさ。
- 2 兼家とは違い、昔の人はどのような雨風でも通ってきていたことを知った怒り。
- 3 兼家が原因で、自分の心と体が離れ離れになってしまったことに対する悔しさ。
- 4 長年通い続けてくれていた兼家の愛情を、ついに失ってしまったことへの無念さ。
- 5 兼家が、南面の人の所を訪れた後、自分の所にも来てくれたことに対するうれしさ。

問九 傍線部h「一日の日は見えずしてやむ世なかりき」の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 例年と同じように、今年も何事もなく正月一日を迎えられたことをいう。
- 2 毎年、正月一日になると、兼家は必ず道綱母のもとを訪れていたことをいう。
- 3 世間では、正月一日を喜んで、様々な祝いの行事が行われていることをいう。
- 4 正月一日には、兼家からの祝いの手紙が届かないことがなかったことをいう。
- 5 ここ数年のことを思い返すと、正月一日は、いつも雨が降っていたことをいう。

問十 傍線部i「急ぐにこそは」の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 道綱母は、兼家が道綱母の邸の前を通り過ぎた理由を、急ぎの用事があったからだろうと思っている。
- 2 道綱母は、兼家が引き返したのは、慌ただしく会う必要がないと考えたに違いない、と想像している。
- 3 道綱母は、未の時になってようやく兼家が訪れた理由を、急な仕事のためなのだろうと思っている。
- 4 兼家は、道綱母の邸の前まで来たものの、忙しそうにしていると感じて、引き返すことにした。
- 5 兼家は、急いで行かなければと思いつつも、結局、この日は道綱母のもとへ行くことができなかった。

問十一 傍線部j「腹立ちな初めそ」を十字以内で現代語訳せよ。

問十二 次の各項について、本文の内容と合致するものには1を、合致しないものには2をそれぞれ記せ。

- 1 道綱母は、兼家のことを信じて待ち続け、その期待どおりに兼家が訪れることになった。
- 2 道綱母は、雨の降り続く日に、道綱母と兼家の関係をよく知っている人と語りあった。
- 3 兼家は、昔も今も変わることなく、道綱母のもとに通ってくることはほとんどなかった。
- 4 兼家は、七日ごろの訪れを含め、十二月には、合計三回ほど道綱母のもとを訪れた。
- 5 兼家は、正月二日になって、ようやく、道綱母のもとを直接訪れ、会話をすることができた。

問十三 「蜻蛉日記」と同じ時期に成立したものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 雨月物語
- 2 落窪物語
- 3 日本書紀
- 4 風姿花伝
- 5 無名草子

13

B

二〇二五年度

国

語

問題冊子（二～二ページ）

注意事項

- (一) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
- (二) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。
- (三) 解答は別に配付する解答用紙の該当欄に正しく記入すること。ただし、解答に関係のない語句・記号・落書き等は解答用紙に書かないこと。
- (四) 解答用紙左下に印刷してある受験学部・学科コード、受験番号、氏名（カタカナ）を確認し、氏名欄に氏名（漢字）を記入すること。もし、印刷に間違いがあった場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。

〔解答用紙記入例（選択式の場合）〕

- 例一：〔語群〕が二桁で
- | | | | |
|----|----|-------|----|
| 11 | 大阪 | 12 | 佐賀 |
| 13 | 長崎 | 14 | 東京 |
| | | とある場合 | |
- 例二：〔語群〕が一桁で
- | | | | |
|---|----|-------|-----|
| 1 | 大学 | 2 | 中学校 |
| 3 | 高校 | 4 | 小学校 |
| | | とある場合 | |

問 X	
16 / 2	A
18 / 4	B
20 / /	C

Aの解答が佐賀の場合
Bの解答が東京の場合
Cの解答が大阪の場合

問 X	
51 /	a
52 4	b
53 2	c

aの解答が大学の場合
bの解答が小学校の場合
cの解答が中学校の場合

〔一〕 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

現在、新聞や雑誌、ネットメディアや一般書で流通しているAIをめぐる言説の多くは、二つの論調の組み合わせによって構成されている。第一に、著名な研究者や企業家の知見や実用化の例を挙げることで、AIの開発が急速に進んでいることを強調するものであり、第二に、AIの発展が引き起こす失業者の増大や経済的混乱などのリスクを^イレッキョ^{*}し、ディストピアを避けるために必要になるだろう規制や対策について考察するものである。前者では、先端テクノロジーによって社会が変わっていくプロセスが強調され、後者では先端テクノロジーが良い影響をもたらすように社会的な合意に基づいて制御していくプロセスが強調される。

この二種類の論調は、科学技術をめぐる二〇世紀の思想を二分してきた^a「技術決定論」と「技術の社会的構成論」の発想に対応している。技術決定論は、技術の本質主義、自律説、自立的存在論とも呼ばれ、技術をそれ自体に内在する論理や推進力をもった自律的な存在とみなす立場である。とりわけ産業革命以降の技術は、自動性、唯一性、空間的・時間的な普遍性、自律的な拡張性をもって世界のすべてを管理の対象として支配するものであるとされる。その影響がポジティブかネガティブかにかかわらず、

i

が

ii

のあり方を決定するのではなく、

ii

が

i

のあり方を決定する。科学技術を進展させているのは結局のところ社会に生きる人間なのだから自律的ではないはずだ、と反論したくなる人もいるだろう。だが、現に私たちは自動車の最高速度が上がり、スマートフォンの通信網が拡充し、コンピュータの計算速度が速くなることをなけば自動的な現象として捉えており、「より便利になるのだから当然だ」と考えている。技術決定論を否定することは簡単ではない。

技術決定論に対する批判的立場として二〇世紀後半に^ロタイトウした社会的構成論は、技術の非自律説、道具説とも呼ばれ、技術は特定の社会(集団)が特定の目的を達成するための中立的な手段である^ロとみなす立場である。人間が何らかの目的を達成するための道具や手段として技術を捉える考え方は常識的なものであるが、社会的構成論は、その手段Ⅱ目的関係が社会的な交渉や合意を通じて構成されるという点を特に強調するものであった。テクノロジーの発展は技術に

A

によって方向づけられ

るのではなく、社会的・文化的な要因によって決定されるものであり、具体的な技術の有り様は、関連する社会集団のあいだの対立や交渉の結果、その技術をめぐる「解釈の柔軟性」が次第に縮減されることによって構成される。

あり方を決定するのではなく、

i

が

ii

のあり方を決定する。たとえば、階段は多くの人々にとってすみやかに

高所や低所に移動できる便利な装置として捉えられるが、車椅子に乗る人々にとってはそこから先に進めなくなるシヨウヘキとして解釈される。現在の公共施設や鉄道駅の多くに見られるスロープが併設された階段は、「バリアフリー」という、より多くの人々が許容できる仕方^bで階段をめぐる解釈の柔軟性が縮減された結果だといえるだろう。

ただし、技術決定論と社会的構成論は、技術と社会を別個の領域として捉えたうえで両者のどちらかに私たちが生きる世界の状態を生み出す最終的な根拠を置く、という点では同型である（いずれに根拠を置くかの違いにすぎない）。両者の対立は、技術／社会という二項対立のどちらの領域がもうひとつの領域の上位に立ち、それを規定するのかをめぐって生じる。これに対して、そもそも科学技術と社会という二項対立を前提とすること自体を批判したのが、一九八〇年代から提唱されてきたアクターネットワーク論である。

アクターネットワーク論の主な推進者の一人である哲学者・人類学者ブルノ・ラトゥールは、技術をめぐる従来の議論を、人間と非人間の関係を一方による他方の支配という図式に還元するものとして批判する。

図式的に整理すれば、科学技術を中立的な道具とみなす社会的構成論では、技術的人工物がいかに作られ使用されるかは人間の欲求や意図によって規定され则认为。これに対して、科学技術をそれ自体の推進力をもった自律的なエイイ^二とみなす技術決定論では、技術的装置がいかに作られ配置されるかによって人間の行為や意図自体が規定され则认为。前者の発想では、技術は人間が自らの目標を実現するための単なる仲介項となり、社会関係に対して副次／従属的なものとなる。後者の発想では、人間は技術が特定の目標を実現するための単なる仲介項となり、科学技術が外部から社会を変化させる。

B

、さま

ざまな現象が人間の側か非人間の側に還元して理解される。人間と技術の接続を通じて生じる状況を両者のどちらかを主語として捉えることは、私たちの日常においてもヒンパツする語り口であろう。たとえば、「私たちはICTでビジネスの未来を切り

ひらきます」といった企業広告や「ゲームが子供を中毒にする」といった警告に見られるように。だが、ラトウールによれば、技術によって生じるのは、むしろ人間と非人間がたがいの性質を交換しあいながら共に変化するという事態であり、両者はたがいの媒介となることで新たな行為のかたちを生みだしていく。そこにおいて、人間以外の存在者もまた、固有の形態や性質をもった行為者（「エージェント」と呼ばれる）として、人間を含む他の行為者と関係しながら特定の現実を構成している。

ラトウールの挙げる次のような例を考えてみよう。市民（人間）と銃（非人間）という二つのエージェントが結びつくとき、両者が合成されて新たなエージェント「市民＋銃」が現れる。この第三のエージェントの働きが、第一のエージェント（人間）に内在する意図（目的①）に完全に従うと考えると、「善良な市民は銃をもつていても発砲などしない」という C 的な説明になる。

一方、銃という第二のエージェントに内在する「人を殺す」という機能（目的②）に完全に従うと考えると、「善良な市民でも銃をもてば殺人を犯しかねない」という D 的な説明になる。

しかし、より一般的には第三の可能性が実現される。二つのエージェントがたがいにたがいの媒介として働くとき、それぞれが元々もっていた目的が「翻訳」される。たとえば、相手を殺すつもり（目的①）で銃（エージェント2、その殺傷能力Ⅱ目的②）を手にした人（エージェント1）であっても、手にした銃の重さに我にかえって、殺人をやめるかもしれないし、銃を脅迫に使って相手を屈服させようとするかもしれないし、銃で人を撃とうと考えた自分に嫌気がさして自殺してしまうかもしれない。こうして、あらかじめ存在する目的①、②とは異なる新しい目的③（殺人の中止／脅迫／自殺など）が生みだされる。ラトウールのいう「翻訳」は、言語の翻訳になぞらえて行為者同士の相互作用を捉えるものであるが、その相互作用は、原語と訳語が一对一で対応しているという言語翻訳の一般的なイメージとは著しく異なる。言うなればそれは、^d 翻訳を通じて原語と訳語の意味が共に変化していくような過程である。異なる行為者がたがいに結びつくことによって、それぞれの行為の向かう先があらかじめ確定できない仕方で変化する。その過程をラトウールは「翻訳」と呼んでいるのだ。

こうしたラトウールの発想は、一見すると道具説（社会的構成論）と自律説（技術決定論）の折衷案のように思われるだろう。だが、そこには前二者とは決定的に異なる要素が含まれている。道具説や自律説では、行為を規定する最終的な根拠があらかじめ

技術と人間のどちらかに与えられている。だが、アクターネットワーク論において行為を規定するのは技術と人間が結びついて生みだされる第三のエージェント、人間と非人間のハイブリッドである。もちろん、技術的人工物と結びついたハイブリッドとしての「人間＋銃＝銃人間」は、銃を制御している。だが、そもそも、どのような仕方人間が「銃人間」となるのかを、人間は完全には制御できない。それを規定するのは人間であると同時に銃であり、より正確には、両者が織りなす相互作用である。

——久保明教「機械力ニバリズム」による——

*デイストピア……………ユートピア(理想郷)とは反対の暗黒世界

*ICT……………情報通信技術

***ハイブリッド……………混成物

問一 傍線部aについて。本文中での「技術決定論」および「技術の社会的構成論」に関する説明として適当なものを次の選択肢の中から二つ選び、その番号を記せ。

- 1 技術決定論において、技術は人間の意志には影響を及ぼさない存在であると考えられている。
- 2 技術の社会的構成論において、技術は人間の意志に従属するものであると理解されている。
- 3 技術決定論は産業革命以来の長い歴史を持っているので、人々の間にすっかり定着している。
- 4 技術の社会的構成論において、技術のあり方を最終的に決定するのは社会的マイノリティの判断である。
- 5 技術決定論において、技術はあらゆる物事をその管理下に置くものであると考えられている。
- 6 技術の社会的構成論は、自動車やスマートフォン、コンピュータの急速な技術的進歩をもたらした。

問二

i

ii

にあってはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号記せ。

- | | | | | |
|---|---|----|----|----|
| 1 | i | 社会 | ii | 技術 |
| 2 | i | 世界 | ii | 対象 |
| 3 | i | 要因 | ii | 結果 |
| 4 | i | 集団 | ii | 合意 |
| 5 | i | 道具 | ii | 手段 |

問三 空白部Aにあてはまる最も適当な言葉をこれより前の本文中から六字で抜き出して記せ。

問四 傍線部bについて。「階段をめぐる解釈の柔軟性」とはここでは具体的にはどのようなことか。その説明として最も適当な

ものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 人々がイメージする階段の形状は、段の高さや幅が異なることはあっても大体同じであるということ。
- 2 バリアフリーの理念が定着したため、全ての人が階段にスロープを併設すべきだと考えているということ。
- 3 技術の進展に伴い、階段やスロープより便利な移動手段の出現に期待を寄せる人が増えているということ。
- 4 階段が便利な移動手段であると認識する人がいる一方で、階段をそのように捉えない人もいるということ。
- 5 普段から階段を利用する人は、スロープの利用者のために極力階段だけを利用するよう求められるということ。

問五 空白部Bにあてはまる最も適当な言葉を次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 アクターネットワーク論のみにおいては
- 2 アクターネットワーク論も含め全てにおいて
- 3 いずれにおいても
- 4 前者においては
- 5 後者においては

問六 傍線部cについて。「人間と技術の接続を通じて生じる状況を両者のどちらかを主語として捉えること」とはここでは具体的にどのようなことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 技術と人間の関係について考える上で、人間の行為と意図のどちらか一方だけを重視すること。
- 2 社会における技術の価値を、人間にとって危険かそうでないかという二者択一で決定すること。
- 3 技術と人間の関係を、どちらかがどちらかを支配するという二項対立の構図で理解すること。
- 4 技術の恩恵を受ける人間だけでなく、技術を生み出す人間の立場も尊重すること。
- 5 技術と人間の関係について、従来の説とラトウールの説のどちらかに立脚して考察すること。

問七 空白部C・Dに当てはまる最も適当な言葉をこれより後の本文中からそれぞれ漢字三字で抜き出して記せ。

問八 傍線部dについて。「それぞれの行為の向かう先があらかじめ確定できない」のはなぜか。その理由として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 現在のアクターネットワーク論では二つのエージェントが結合するかどうかまで予測することは不可能であるから。
- 2 ある行為を最終的に規定するのは二つのエージェントの相互作用によって新たに生まれるものであるから。
- 3 アクターネットワーク論の登場以前から第三のエージェントは行為を規定する能力を失ってしまっているから。
- 4 第三のエージェントは必ずしも第一・第二のエージェントが結合してできたものであるとは限らないから。
- 5 第一・第二のエージェントの目的は第三者には決して窺^{うかが}い知ることができないものであるから。

問九 「こうしたラトウールの発想は」から始まる本文の最後の段落には次の一文が抜けている。これが入る直後の一文の最初の五字を抜き出して記せ(句読点を含む)。

したがって、アクターネットワーク論の発想を正面から受けとめれば、そもそも人間は技術を制御できないし、制御などしていないことになる。

問十 本文の内容に合致するものを次の選択肢の中から二つ選び、その番号を記せ。

1 AIの弊害を避けるための方策を重視する論調は、筆者によれば技術の社会的構成論と対応している。

2 アクターネットワーク論を援用することで、筆者はAIが社会に深刻な被害を与える可能性が低いことを論証しようとしている。

3 アクターネットワーク論においては、人間だけではなく非人間もまた相手に影響を及ぼそうという意図を持つ知的存在であるとされる。

4 銃は「人を殺す」という能力を有するが、ラトウールが例示するように殺意を抱いて銃を手にした人間が殺人以外の行動を取る場合もあり得る。

5 技術決定論と社会的構成論の対立は収まる気配がないので、ラトウールは両説の間の妥協点を探ろうと試みている。

6 ラトウールは、言語の翻訳がしばしば原語と訳語との単純な一対一関係になってしまうことを批判している。

問十一 傍線部イ、ホを漢字に直し、正確に記せ。

〔二〕

次の紀行文を読んで、後の設問に答えよ。

尾道といふ所より、舟に乗りておもしろき浦々に心を慰めて、少し故郷も忘れぬべき心地してなむ下りけるに、春のものとて雨そそぎしけり。日もやうやう暮れなむとすれば、人住む所にもあらぬ、わづかなる沖の小島に舟寄せて、一夜寝^aにけり。たぐひなくもの心細う、浮き寝のあはれも身に知られて、まどろむとしもなく、涙の折り知り顔なるに、時しもあれ、苦洩^{とま}る雪^{しずく}の袂^{たもと}に加はりけるを見て、

夜もすがら苦洩り明かす春雨に浮き寝の袂なほしぼるかな^b

見もはてぬ浮き寝の夢の行く末を誘ひて帰る波の音かな

波路遙かに分け過ぎつつ、い^cかがありけむ、このほどの疲れにや、眉の上重くなり、心結ばれ、たゆたふ舟のうちも、い^dぶせくうるさかりければ、少し心休めむと、童一人具し、あたりの島に上がりて、こなたかなた見歩きけれど、まれにも人の行き通ひける跡さへなかりけり。波の音のみす^eごう聞えて、いとど袖の上もしをれがちなるに、昔いかなるもののしわざにかありけむ、五丈ばかりありける石の面に、

あはれなり雲路つらなる波の上に知らぬ舟路を風にまかせて^f

という古き歌をぞ書き付けける。また人も惑ひ来て、かかる所のあはれを身に知りけるよと、いと悲しうおしはかられぬ。

その浜に下り居て、手すさみながら、小さく美しき貝^gどもの多くあるを拾ひ持ちて、やうやうもとの舟に來けり。

隣の国安芸の厳島に詣でて、一年筑紫に下りしとき、宿^gりける坊の主を尋ね侍りければ、「一昨^h年身まかりぬ」と弟子なりける法師の語りける。今思へば、その頃七十ばかりになむ見えつる。恨むべき齡ならねど、また歸り來ぬ道は、いと悲しうなむ。逢ひ見て物語など（１）ほどは、六年にぞなりにける。なにごともはかなき夢とのみなりはてて、皆歸らぬ昔となりにけり。かの坊の泉水心をつくし、草木など植ゑ置きたり。

なき人の手づから植ゑし草木ゆるゑ庭も籬^{まがき}もむつまじきかなⁱ

とよみければ、皆人袖をなむ濡らしける。その庭の内に、自らいと大きな石あり。苔むし、物古りたるうへに、いとおもしろき松ひとり立てり。作りなさは、この他のことはさもありなむ。これには、いかならむ工たくみの人もえ及ぶ（2）ける。

——「九州の道の記」——

*五丈……約十五メートル

問一 傍線部 a の文法的説明として適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 格助詞「に」
- 2 接続助詞「に」
- 3 断定の助動詞「なり」の連用形
- 4 完了の助動詞「ぬ」の連用形
- 5 動詞「寝」の活用語尾

問二 傍線部 b の解釈として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 苔から漏れる雨に加え、旅寝の悲しさで流れる涙にも濡れた袂を絞ることだ。
- 2 季節外れの雨に備えていなかったたので、ずぶ濡れになった袂を絞ることだ。
- 3 日中ずっと涙をこらえていたせいで、夜は夢の中で涙を流し濡れた袂を絞ることだ。
- 4 旅の寂しさを分かち合える友の顔を見た途端に涙があふれて、濡れた袂を絞ることだ。
- 5 苔から寝床へ漏れ落ちる雨を一晚中袂で防ぎ、翌朝にその濡れた袂を絞ることだ。

問三 傍線部 c を十字以内で現代語訳せよ。

問四 傍線部 d・e・i の意味として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

d					e					i				
1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
体を動かせず面倒だったので	気詰まりで騒がしかったので	うつとうしく煩わしかったので	狭苦しくて腹立たしかったので	不潔で落ち着かなかったので	いまいましく	激しく	ふさわしく	面白く	寂しく	親密な仲である	心がひかれる	礼儀正しい	高貴である	整って美しい

問五 傍線部 f について。これは『新古今和歌集』の仮名序を著した藤原良経の和歌である。『新古今和歌集』の撰者を務めた歌人を次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 紀貫之 2 柿本人麻呂 3 西行 4 藤原定家 5 在原業平

問六 傍線部 g と同じものを指す言葉を和歌の中から三字で抜き出して記せ。

問七 傍線部 h の解釈として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 短命を恨むほど若くして亡くなったわけではないが
- 2 恨んでいた相手が余命いくばくもないと知って同情したが
- 3 一昨年也会ったので相手に恨まれるほどの無沙汰ではないが
- 4 年齢を重ねたため自分の不遇をよりはや恨めしくは思わないが
- 5 恨み言を言うのが遠慮されるほど高齢というわけではないが

問八 (1) には動詞「す」と過去の助動詞「き」が接続したものが入る。適当な形に活用させてひらがなで記せ。

問九 傍線部「」の解釈として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、その番号を記せ。

- 1 作り出したいのは、この苔むした石の上の松以外の何物でもない。
- 2 この苔むした石の上の松さえうまく作り出せたら、他のものはどうでもよい。
- 3 作り上げようと思ったところで、庭園の他のものすら作ることができないであろう。
- 4 この苔むした石の上の松すら作れたので、庭園の他のものは簡単に作れるであろう。
- 5 作りあげようとするば、この苔むした石の上の松以外のものは作れるであろう。

問十 (2) には助動詞「まじ」が入る。適当な形に活用させてひらがなで記せ。

問十一 本文の内容に合致するものを次の選択肢の中から二つ選び、その番号を記せ。

- 1 作者が石に和歌を書き付けていると、そこに一人の迷い人が通りかかった。
- 2 旅の資金を稼ぐために、作者は小さく美しい貝を拾い集めた。
- 3 作者は童と二人であたりの島に上陸したが、そこには他に誰もいなかった。
- 4 かつて作者の弟子だった僧は、巖島に下り昨年亡くなった。
- 5 作者は尾道から巖島を経て筑紫に下り、そこで六年間を過ごした。
- 6 作者は旅の景色の面白さに、故郷を忘れてしまいそうな心地がした。